

気持ちを伝える会話表現 —映画データベース開発—

田淵 龍二 (ミント学習教室)

マイク キャネヴァリー (マイ・イングリッシュ)

はじめに

伝統的訳読授業は大筋、「(1) 英文提示 (2) 語彙文法文化などの解説 (3) 模範訳提示」となる。「模範訳」を自力作文でできれば「英文の意味を理解した」と評価でき、その学習過程が「(2) 語彙文法文化などの解説」だが、ここには問題が潜んでいる。この学習を日本語で行なえば生徒にはわかりやすく効率もよいが、記憶に定着するのは「英文」ではなく、「日本語による理解」となる可能性がある。他方、英語による方が「英語の学習」にはなるが、日本人学習者が十分に理解しながら安心して学習を継続できるかあやしい。

文法的理解が外国語学習を効率的にすることは実証されている。他方、日本での英語学習環境の多くは、実践利用体験から切り離されている。そこで、文法 vs 実践、解析 vs 経験、学習 vs 習得、知識 vs 技能。こうした二律背反を統合しようという試みが、「模擬体験」を可能にする映像を使った英語実践授業研究である。

教材としての映画

ところで、表情や気持ち、情景や出来事を統合的に表現した **authentic** 教材として映画が注目されてきた。しかし、それほど流行らない理由は「効率の悪さ」にあるようだ。

1回1回の授業課題に適合した用例や語彙をスムーズに提示することが、授業を効率よく運営して、学習効果を上げる必要条件だが、あらかじめ「教材」として作成されたわけではない娯楽映画の利用には無理が多い。

経 過

そこで、**2005年** 映画まるごとデータベース化(台詞とト書き)作業に着手し、目的の場面を簡単に提示させることができるようになった。**2006年** 社会人の英会話教室(前橋市)で映画を使った授業開始。「台詞を使った会話練習」と「ト書きを使った英語表現」の2系統。週1回90分のうち30分~45分を1年間。映画は「オズの魔法使い」と「カサブランカ」。

今回の目的

こうした実践を経て、**今年度(2007年)**は「気持ちを伝える英語表現を、母語に抛らないで、映画のシーンを使って、効率的に習得させる」という課題【映画場面提示を使った主体的意味理解への誘導による習得=場面/気持ち/言語表現の三位一体的記憶定着】の授業実践を報告する。

手 段

映画データベースからあらかじめ収集しておいたシーン(数秒~十数秒)を、スクリーンに提示しながら授業を進める。

使用機器

パソコン、プロジェクタ
m-Boxed(プレーヤーミントプロ版内蔵USB-HDD)

認知的要件

「伝えたい気持ち」の主題を「映像に自ら語らせる=学習者による主体的自律的 **autonomous** 理解」を担保するために、同類のシーンを複数(たとえば May I...?の発話場面を3つ程度)提示し、「伝えたい気持ち」の共通概念(この場合は丁寧な依頼)を抽出させる。ただ、主体的意味

理解への期待だけでは、認識のズレや誤解の余地があるので、言語による解析的説明は排除しない。学習者による習得（場面／気持ち／言語表現の三位一体的記憶定着）を促進するためには、「映画場面提示による主体的意味理解への誘導」と「記述言語による解析的意味教示」の均衡を図ることが必要要件である。

技術的要件

映画を使った授業を効果的に進めるには、以下の諸点が必要要件となる。「授業で利用する英語表現」と、その「英語表現が記録されている場面（再生位置）」について

- 1) すぐに探し出せること（映画データベースからの収集、**コーパス機能**）
- 2) すぐに再生できること（特定場面の**ピンポイント再生**、提示機能）
- 3) 音声や文字を提供・非提供して発話練習等が繰返しできること（**演習機能**）
- 4) 授業の準備がたやすくできること（授業前10分）（教材としての完成度）

素材的要件

たとえば「May I...?は丁寧な依頼」との記述的文法的説明だけでは動機付けが弱く、臨場性に欠ける。他方、映画では実際の活用場面を物語の流れとともに確認できるので、人間関係や状況の中での生きた発話として学ばせることができる。（May I...?がいいか Can I...?がいいかと言った）言語表現の違いによる伝達内容の差異をも習得させるには、それを理解させるにちょうどよい場面がデータベースに収録されていることが必要となる。

授業の準備

① 授業で取り上げる慣用語句＝自分の気持ちを伝えるための英語表現を決める。② 英語表現（例えば、May I...）を、プレーヤーミントの「音のコーパス・データベース検索」を使って検索（17件ヒット；映画4本）し、授業目的に合ったフレーズ（シーン）を3～5程度収集。③ ヒットしたシーンごとに、10～20秒程度取り出し、タイトル（会話練習用）を作成しておく。あるいは、検索結果をそのままファイルに保存しておく。

授業方法

① 学習目的の英語表現（伝えたい気持ちの場面と台詞）を含むシーンを見聞きさせる。② 英語表現の解説や場面（ストーリー）の説明。③ リピートアフターなどで発話練習をした後、配役を決めて模擬発話練習（配役ごとに彩色、特定配役の無音化によるキャストスピーキング）。

反復練習

目の前に起こっている出来事に自ら関与して体験化することで統合的な長期記憶への定着を図るために、練習を重視して、シーンの視聴と模倣発話を反復し、配役割り振りを含む全員参加型授業を行なった。

評価方法

(A) 大半の生徒が声を出せたか？ なめらかにしゃべれるようになったか？ 気持ちに合った発話表現（感じが出ている）か？
 (B) 会話の一部だけを無音にして映像を見せ、発話させ、場面に適合した（May I...?などの）表現ができたか？（この場合、映画の台詞と同じでなくてもよい）

今後の課題

データベースとして利用できる映画を増やす必要がある。英文台詞はフレーズごとに聞きとりながら書き起こし、ト書きもシーンごとに再生しながら書き下ろすので映画1本のデータベース化に半年かかる。気持ちを伝える会話表現の授業風景（動画など）については、以下のサイトアドレス（見つからない場合は「ミント 英語学会」で検索）に掲載を予定している。

http://www5b.biglobe.ne.jp/~mint_hs/news/n20070615.html